

図書館だより

古典籍の活用	—坂本 清恵	1
日本女子大学叢書の紹介		
小山聡子著『演劇／ドラマの手法とソーシャルワーク教育』	—小山 聡子	2
著作紹介 清水睦美・児島明・角替弘規ほか著『日本社会の移民第二世代—エスニシティ間比較でとらえる「ニューカマー」の子どもたちの今』	—清水 睦美	3
ケルムスコット・プレス版『トロイ物語集成』	—川端 康雄	4
図書館エントランス展示	—南木 香織	6
カウンター質問あるある—迷えるあなたへ	—閲覧係	7
図書館からのお知らせ		8



8 伝為世筆嘉禄本『古今和歌集』と伝慈鎮・為家筆『伊勢物語』

古典籍の活用

坂本 清恵

前号で和歌について触れましたが、その直後、驚くべきニュースがありました。藤原俊成・定家・為家と続く御子左家の末裔が守る京都・冷泉家の時雨亭文庫から、今まで知られていなかった定家自筆『顕注密勘』が発見されたとの報道でした。当代当主が生涯一度のみ開くことが許される古今伝授箱中に眠っていたそうですが、冷泉家のお蔵がいかに深いものであるのか感じずにはいられません。文庫では朝日新聞出版から影印叢書を刊行され、貴重な典籍・資料を公開されてきましたが、今般発見された新資料も、一日も早く、もしも可能であればカラーで公開していただけたらと思います。

ところで、NHKの京都NEWS WEBにより、このニュースを視聴した際、アナウンサーは『顕注密勘』を「ケンチューミッカン」と、太字部分を高く、ひとまとめではないかたちで発音していました。これが東京のアクセントであれば、「ケンチューミッカン」と一続きで発音されるのですが、いかにも関西らしく、分けているのだろうかと思いました。『顕注密勘』は、六条藤家に属する顕昭が著した『古今集註』に対し、定家が自説を書き加えた書物であり、タイトルどおり「顕注」を「密勘」したものです。これまでも日本語研究では、そこに繰り広げられる清濁の読み、アクセントによる語の解釈が、注目されてきました。中には、「あたなれ」を内裏歌合で講師（読み上げ役）が「あた（仇）」と読み上げ、笑った人がいたとのエピソードを示し、「あだ（徒）」でも「あた（仇）」でもどちらもあり得るとしています。これまでは顕昭と定家のうちどちらの声点（アクセント注記）なのかが判断しにくいものがあったので、この発見を機会に、研究が進むのではないかと期待をしています。

昨年、日本の古典籍に関わる総合ウェブサイトとして、「国書データベース」の運用が始まりました。国文学研究資料館の調査累積をベースに、『国書総目録』の記載や、諸機関で公開されている画像データとの連携、所蔵目録索引情報の掲載など、徐々に拡充がなされています。こうして、世界中の日本研究者が、原資料に簡便にアクセスできるようになってきました。しかし、内外に所蔵される貴重資料には、非公開のものも多いうえ、文庫自体が閉鎖され行方不明のもの、閲覧の機会を閉ざしてしまった所蔵機関もあります。本学も、所蔵の和装本、古典籍を秘蔵するのではなく、公開に向けて、デジタル化への準備を進めていきたいと考えています。

(図書館長・日本文学科教授)

小山聡子著『演劇／ドラマの手法とソーシャルワーク教育』（日本女子大学叢書26）

小山 聡子

2008年の夏ごろ、当時公立中学校1年生だった私の娘が、演劇に興味があるものの学校に演劇部がないためにどこか活動の場を探しているという状況の中で、正嘉昭（ただしよしあき）率いるところざわ太陽劇団に出会った。見学を経て年1回の公演に出ることを許された娘が演じたのが、畑澤聖悟による「河童」という作品中の学級委員役である。クラスに一人段々河童になっていく子がいていじめにあうというストーリーで、公演を見に行ったときに、演劇という「虚構」の中で「リアル」な感情体験をしている娘の姿に胸を打たれた。

私自身は舞台上で演じる、いわゆる「シアター」と言われるような演劇活動には縁もゆかりもなく、客席に明瞭に届くためとはいえ、普段の会話なら出さないような大きな声でしゃべるあんな活動の何がいいんだろうとすら思っていた。しかし、そうした本番に向けたトレーニングの一つとして取り組まれるドラマケーションと言うアクティビティ（ドラマの手法）に自らも参加した時、直感的にそこには自身が担当するソーシャルワークの演習教育に大きく資する「何か」があると確信したのである。そこで2010年代に社会福祉学科が持っていたコース制のうち、私がチェアを務める人間関係コースの集中授業に取り入れるようになった。

「対等でゆがみのない人間関係を作り、味わう」と銘打ったこの集中授業は、毎年学生たちから多くのポジティブな反応をもらい、充実した取り組みとなったものの、その根底にあるものが一体何なのか、考察の過程を学会で発表したり、同僚教員に開示したりしてもなかなか納得が得られない。本書はその呻吟から逃げずに、演劇的なものの位置づけを社会福祉のみならず教育領域全般に広げた先行研究を踏まえて、自身の実践を質的に分析し、一定の答えを得ようとしたものである。

全体を通して、提供する教員側（私）の姿を決して不可視化せずに、学生たちとの間に生じた関係としてそれを描き出そうとしたのは、私自身がポストモダンの社会思想に強い影響を受けており、中立とか客観という概念自体に疑問を抱くようになってきているためである。

また、私が演劇／ドラマの手法にそこまでこだわる背景には、近年のソーシャルワーカーへの批判動向やそれに伴う反省的言説への振り返りがある。そこで、グランドセオリーとしてのクリティカル・ソーシャルワーク理論を取り上げ、具体的にはその理論が大切にする「人々の開放」「事態の脱構築」「行為の中の省察」をドラマの手法はどのようにして可能にするのかという論の立て方をした。本教育実践を分析するにあたり、参照した重要な概念は「即興性」及び「身体への回帰」で、加えて集中授業の原則としての「評価の解体」「参加の自由」も手掛かりとした。

結果として、学生は普段ないがしろにしがちな身体感覚に回帰することで五感の覚醒を味わいつくし、有意味言語がむしろ互いを見えなくさせる皮肉に気づくこと、また評価の解体原則によって自身を縛る規範の存在に気づき、それを揺さぶる可能性に開かれること等がわかった。ただし、身体の語る言葉に開かれるということは、同時に起きたことや獲得したものの言語化を難しくさせることがある。こうしたジレンマの中で他の授業と協働し、クリティカルに状況を分析しながら目の前にいる一人一人と「出会う」ことを可能にするのが演劇／ドラマの手法ではないだろうか。教員側の変化としてはどう頑張っても教育の場が持つ権力関係の存在を改めて突き付けられるとともに、育てた子どもが場合によっては親を否定して巣立っていくような事態を喜ぶ構えが出来た。本テーマは、社会福祉領域ではありそうで案外なかった枠掛けであると自負している。

(社会福祉学科教授)

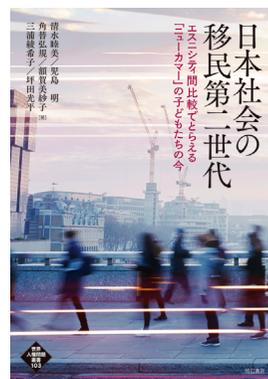
2024年1月発行 明石書店 277頁 *図書館目白所蔵, 請求記号369.16||Oya

著作紹介

清水睦美・児島明・角替弘規ほか著『日本社会の移民第二世代—エスニシティ間比較でとらえる「ニューカマー」の子どもたちの今』（世界人権問題叢書；103）

清水 睦美

本書は、6名の研究者による共同研究の成果としてまとめられたものです。著者として名前を連ねるそれぞれの研究者は、外国ルーツの子どもたちを対象として、特定の国や地域に焦点をあてつつ研究を蓄積してきましたが、本研究では、出身が異なることによる日本社会での経験の違いを、可能な限り明らかにすることに挑戦しました。それがタイトルに盛り込まれた「エスニシティ間比較」という言葉の意味になります。その結果、170名の若者を対象とすることになりました。加えて、本研究で対象となった若者の多くは、インタビューである研究者が長く関係を結んできたものたちになっています。というのは、最初の出会いは研究に動機づけられたもので、かれらはまだ小中学生という幼い時期にあったわけですが、その後も、困ったときの相談相手であったり、必要な情報を提供してくれる支援者の立場だったり、近況を報告する友人であったりと関係を継続してきたのです。このことは、最初から意図的に仕組んできたわけではないのですが、結果として、かれらを追跡することになり、それが見えにくくなりがちなかれらの経験への洞察を深めるように作用しています。タイトルに盛り込まれた『「ニューカマー」の子どもたちの今』という言葉は、このような研究背景を表しています。



このように、本書では、日本生まれ、もしくは幼小期に来日して、日本の学校に通いながら育った子どもたちを「移民第二世代」という枠組みで対象化し、研究者とともに共有してきた時間を振り返りながらインタビューを行いました。それを通して、アイデンティティが形成される過程、ジェンダー規範が継承される過程やトランスナショナリズムが構築される過程など、いずれも経過を踏まえた分析が可能になっているところに、本研究の独自性があるといっていいただろうと考えます。具体的な例をあげれば、ハイブリッド型のアイデンティティを獲得していく場合、既存の研究では、親からの支援が必須とされてきましたが、本研究では、親からの支援がなくとも、地域のボランティア団体や多文化的仲間集団からの支えに頼りながら、自らのルーツを確認・維持する姿を捉えることに成功しています。さらに、こうして獲得された自国に関わる資源によって、家族の親子関係が再構築される過程があることも発見されています。

本書の特徴として、もう一つ触れておきたいのは、第Ⅱ部の「学校経験」に焦点をあてた分析です。先のアイデンティティ、ジェンダー、トランスナショナリズムといった分析枠組みは、エスニシティ研究に馴染みのあるものですが、それと異なるのが「学校経験」です。なぜ、この観点での分析が必要であったのかと言えば、インタビューを通して、かれらの多くが日本の学校で「排除」を経験しており、それが、その後の人間関係の編み方に大なり小なり影響していることが見えてきたからです。身体的特徴や日本語に不慣れであるため異質性が顕在化しているような場合には、「他者化による疎外感」を味わうことになるのですが、他方では、できるだけ目立たないように振る舞えば振る舞うほどに、小さな違いに自身が葛藤してしまうような「同化への巻き込まれによる疎外感」を味わっていることもあります。これらの経験もエスニシティによって偏りがあることも発見されています。

本書の面白みは他にもまだまだありますが、いずれの章も、日本で大きくなった外国ルーツの若者の語りをもとに、かれらの経験を日本の社会構造に結びつけて検討しています。そのことは翻って、日本社会を私たち自身が捉え直す視点を提供することになっていると思います。かれらの経験に触れながら、私たちが生きている社会を問い直していただけたら大変うれしいです。

(教育学科教授)

ケルムスコット・プレス版『トロイ物語集成』

川端 康雄

前号の『黄金伝説』に引き続き、今回もケルムスコット・プレス（以下、KPとも略記）刊本のうちでウィリアム・カクストンの復刻版のなかから『トロイ物語集成』を取り上げたい。書誌データは以下のとおり。

KP 書目第8番『トロイ物語集成』(*The Recuyell of the Historyes of Troye*) ラウル・ルフェーヴル著、ウィリアム・カクストン訳、H・ハリデイ・スパーリング編。全2巻。大型2折判、(287×205mm)、740頁。トロイ・タイプ(本文)、チョーサー・タイプ(目次および語彙説明)。二色刷。木口木版題扉付。軟ヴェラム装、絹紐付。紙刷本300部(9ギニー)。ヴェラム刷本5部(80ポンド)。コロフォン日付1892年10月14日。バーナード・クォリッチ社より1892年11月24日発売。

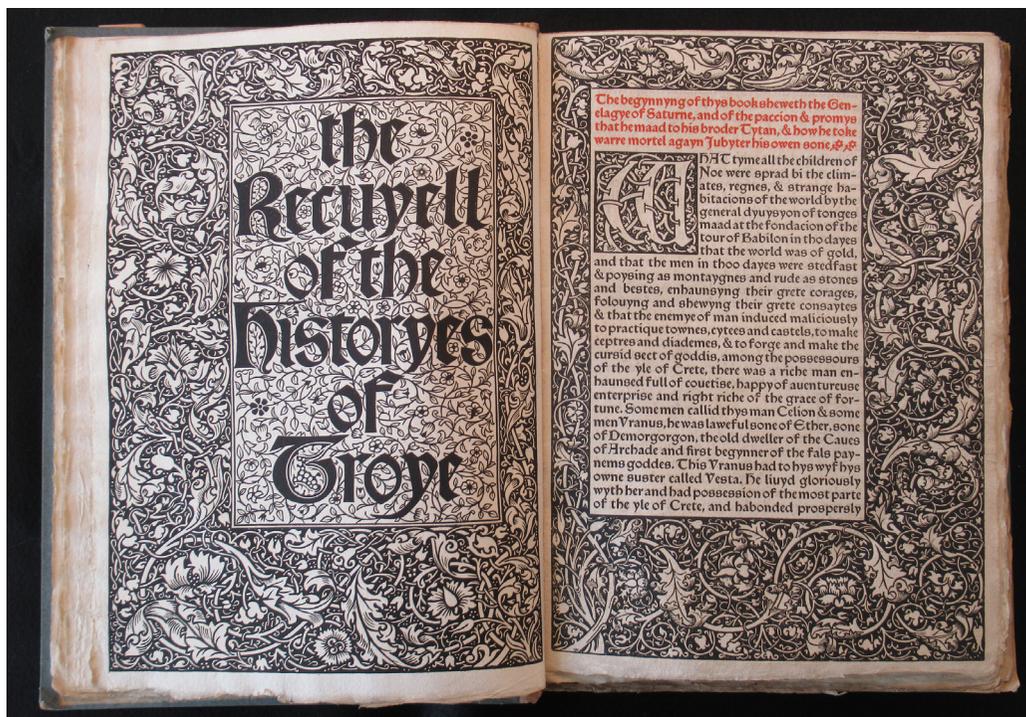
カクストン版はブルージュ(現ベルギーの古都)にておそらく1473年(もしくは1474年)に印刷された。これが英語史上初の英語の活版印刷本とされる。そのもととはフランス15世紀の著述家ラウル・ルフェーヴル(Raoul Lefèvre)の著*Recoeil des histoires de Troyes*(1464)で、それをカクストン自身が英訳して印刷した。書名の和訳としては*histoires*を「歴史」と訳しているものもあるが、内容はギリシア(ローマ)神話をソースとする「伝説」あるいは「物語」なので、本稿では上記の訳語としておく。

ギリシア(ローマ)神話のなかで重要な部分を占めている「トロイ(ア)物語」は、「パリスの審判」を発端として(もっと遡ればペレウスとテティスの婚礼の祝宴に女神エリスが投げ入れる「不和の林檎」の挿話からということになるが)、トロイの王子パリスによるスパルタ王メネラオスの妻ヘレネの略奪、彼女を奪還すべくアガメムノンを総大将として結成されたギリシア連合軍のトロイ遠征、10年におよぶトロイの包囲戦、アキレウスとヘクトルの一騎打ちと後者の戦死、「トロイの木馬」の策略による城壁の突破、プリアモスの死と最終的なトロイの陥落、ギリシアの勝利に至る、一連の物語の「環(サイクル)」ということになる。

とはいえ、本書でその本来の「トロイ物語」が扱われるのは第二巻に入ってだいぶ進んでからのことで、分量でいうと全体の3分の1程度にすぎない。第一巻では農耕の神サトゥルヌス、ティーターン、ユピテルら神々の系譜を辿り、ユピテルとダナエから生まれた英雄ペルセウスのメドゥーサ退治などの冒険、そしてアクリシオス王の死による予言の成就を語り、第一巻の終わり近くから第二巻の初めにかけては英雄ヘラクレスの偉業を語る。そのなかで冥府の神ハデスによるペルセポネの略奪、また急死したエウリディケを音楽の力で冥府から奪還せんとして失敗するオルベウスなど有名な説話を多く散りばめ、トロイ戦争終結後はギリシア帰還後のアガメムノンの妻クリュタイムネストラによる夫の殺害(復讐)のような後日談も入れている。「集成(Recuyell)」の名のとおり、ギリシア(ローマ)神話の中世版アンソロジーの趣きを呈している。

本書は『黄金伝説』と並んでモリスの長年の愛読書だった。クォリッチ社の刊行案内に彼はこう記している。「本書の中身は実に面白い話で、中世の思考と風俗が一杯つまっている。というのも中世の末期に書かれていてしかも古典世界の神話を扱っているのに、来たるべき「ルネサンス」の徴候はまったく見られず、純然たる中世の話になっているのだから。これは中世全体をとおしてかくも人びとの想像力を捕らえて離さずにいたトロイ物語のうちで最後に出された本なのである。[...]混じり気のない中世的精神の一作品としてだけでも、確かにこれは十分に味読に値する」。モリスがそう指摘するとおり、この本はギリシア(ローマ)神話がチョーサーの(騎士道物語もあれば艶笑譚もある)『カンタベリー物語』にも似た高邁さと卑俗さを併せ持つ中世説話集に変容している。

KP刊本のなかでトロイ・タイプとチョーサー・タイプを最初に用いたのがこの本であった。ゴールデン・タイプがローマン字体であるのに対して、この二つはゴシック字体でデザインされた。



ラウル・ルフェーブル著、ウィリアム・カクストン訳『トロイ物語集成』（ケルムスコット・プレス、1892年）
校正刷題扉 活字（トロイ・タイプ）、書名レタリング、縁飾り、装飾頭文字のデザインはウィリアム・モリス
の手になる（所蔵：日本女子大学図書館）

両者の違いはサイズだけで、トロイ・タイプは「グレイト・プリマー」大（18ポイント）、チョーサー・タイプが「パイカ」大（12ポイント）である。1890年の末に完成させたゴールデン・タイプからおおよそ1年後にこれが出来上がった。モリス自身の言によれば、ゴシック活字をデザインする際に自己の課題としたのは「一般にゴシック字体に対して言われる読みにくいという非難からその字体を救い出すことだった。[...]これはローマン字体に劣らず読みやすいものだと自負する字体で、実は私のローマン字体よりも気に入っているものである」（「ケルムスコット・プレス設立趣意書」）。KPの秘書を務めたシドニー・コッカレルは、この字体には「マインツのペーター・シェッファー、アウグスブルクのギンター・ツァイナー、ニュールンベルクのアントン・コーベルガーの影響が窺えるが、ゴールデン・タイプよりもさらに強い独自の個性を備えており、主としてこの点でいかなる中世の活字とも異なるものになっている」と評価している（「ケルムスコット・プレス小史」）。『黄金伝説』と同様に本書もモリスが書店主クオリッチと契約書を交わして、印刷費用をクオリッチが負担して彼の会社から予約販売された。クオリッチからモリスに支払われた印刷費は、併せて1012ポンド10シリングだった。

日本女子大学が所蔵しているKP版『トロイ物語集成』は通常の市販された版ではなく、非売品の「校正見本」である点が他の書目と異なる。書誌データに示したとおり、通常の紙刷版は軟ヴェラム装なのだが、当該本はクォーター・ホランドで製本されている。背表紙には題名等の文字が何も記されていない。校正刷といってもごくわずかな要修正箇所があるだけの、ほぼ最終段階の全二巻の揃いである。それに加え、第二巻のコロフォンの後に紙刷の試刷が数十ページ分（同一ページをいくつか含む）、さらにはヴェラムに刷った試刷が8ページ分含まれている。前者には何人かによるペンによる書き込みがあり、モリスとハリデイ・スパーリングの手も入っていると思われる。どのような意図でこのような形態で残されたのか不明であるが、いずれにせよ、これはKP本の制作過程を探るうえで参考になる稀少な資料であると言えるだろう。（文学部名誉教授）

図書館エントランス展示

南木 香織

「貴重書『源氏物語』展示～目で見て、読んで楽しむ『源氏物語』～」

(2024年3月14日～2024年5月30日)

2024年の大河ドラマの主人公は、平安時代に千年の時を超えるベストセラー『源氏物語』を書き上げた紫式部です。『源氏物語』に注目の集まる今、本学学生保護者の会である泉会によりご購入いただいた、貴重書『源氏物語』を展示しました。4つある展示台には、「貴重書」の他、「垣間見」「衣装」「和歌」をテーマにした『源氏物語』関連書籍が並べてあります。

展示している貴重書『源氏物語』をよく見てみると、有名な巻は左下の部分が少し開き気味になっていて、実際読み物として親しまれていたことがうかがえます。桃山時代ならではの仮名遣いにも注目です。

『源氏物語』を漫画で読まれた方も多くでしょう。昔の人々も有名な場面は絵にして楽しんでいたようです。光源氏が幼い紫の上を「垣間見」する場面は有名ですが、『源氏物語』にはたくさんの「垣間見」場面が登場します。「光源氏」、「蔵人少将」、「薫」の垣間見場面の絵を掲載した図書を展示台にまとめました。構図が似通っていて、並べてみると楽しいですね。



『源氏物語』の書かれた平安時代の装いといえば、華やかな十二単です。『源氏物語』に表現されている衣装の再現は、何度か試みられています。展示台では、登場する女君達の衣装を紹介しています。文章から衣装を想像してみましょう。展示図書に掲載されている、美しく染められた布が重なる様子や絵巻に表現された艶やかな色彩は、物語を知らない方でもため息が出るのではないのでしょうか。

大河ドラマ「光る君へ」で和歌考証を担当しているのは、本学名誉教授高野晴代先生です。和歌のすばらしさをお伝えするのは本学の先生方にお任せするとして、この展示台では和歌の意匠が楽しめます。和歌が絵と文字で表現された「初音の調度」や、扇にのせた夕顔の花を手渡す様子を切り取った絵巻。和歌一首からその物語の情景が目浮かぶ、又は印象深い一場面から和歌が思い浮かぶ楽しさを感じていただければと思います。

貴重書『源氏物語』を目にして、もっと知りたいという意欲が高まった方には、『図書館だより』149号と174号の巻頭がお勧めです。もう一度『源氏物語』を読み返したいと思った方は、別の訳者や原文に挑戦するのもいいですね。『源氏物語』に触れてみたいと思われた方は、手軽な「新書」や『源氏物語』にちなんだ絵画、衣装、香り、いけばな等を紹介した図書も所蔵していますので、是非図書館で『源氏物語』の世界を色々な角度から味わってみてください。

(館員・閲覧係)

カウンター質問あるある ～ 迷えるあなたへ ～

 探している本がないんです！

⇒ OPACは検索しましたか？その図書の「配置場所」と「請求記号」を確認してください。配置場所「図書館目白」は、請求記号によって階が分かれています。

 「配置場所」が「ずもく」の図書はどこにありますか？

⇒ 「図目」（図書館目白の略「とめ」）でしょうか？図書館内の配置場所を示しています。その先はなんと書いてありますか？「図目集密」なら地下1階です。

 「配置場所」に研究室名がある図書は借りられますか？

⇒ 研究室により異なります。カウンターにご相談いただければ学科毎の対応をご案内します。

 「西生田保存書庫」や「JCCM」や「JCCT」とある図書は借られますか？

⇒ 取り寄せになりますが、借りられます。「西生田保存書庫」はOPAC、「JCCM」「JCCT」はカウンターで取り寄せ手続きをしてください。申込の時間によりますが、翌開館日から翌々開館日に到着します。

 昨日返却した黄色い本をまた借りたいです。

⇒ タイトルはわかりますか？ My JWULISで、ご自分の貸出履歴からタイトルをご確認ください。

 利用したい図書が貸出中です。

⇒ OPACから「予約」ができます。他の「配置場所」の表示はありますか？「西生田保存書庫」が表示されている場合は、取り寄せも可能です。表示されている返却期限では、利用予定に間に合わない場合は参考係に相談するか、近隣の図書館での閲覧もご検討ください。

 エレベーターはありますか？

⇒ 入り口から見えにくいですが、中央階段の向かい側にあります。

 電動書架があげられません。

⇒ 同じブロックの他の通路が空いている場合は開けられません。開いている通路に人がいない場合は、通路を閉じて、ご希望の通路を開いてください。

 「ルイス・キャロル」で検索しましたが、思うようにヒットしません。

⇒ 外国の著者の場合は、原綴りで「Lewis Carroll」と検索すると、多くの図書が検索できます。

 返却期限日に都合があって図書を返却に行けません。

⇒ 予約がなければ My JWULISより Web上で1回だけ、貸出更新ができます。既に更新済みの場合は、翌開館日の開館時間前に外の返却ポストに返却すれば、延滞にはなりません。発送控が残る郵送での返却も受け付けています（着払い不可）。

 持ってきたPCの調子が悪くなりました。

⇒ メディアセンターへご相談ください。図書館でもPCの貸出は可能です。

 図書館のパソコンの「JASMINE 端末」とは何ですか？

⇒ JASMINE アカウントをお持ちの方が、レポートの作成などに利用できる端末です。JASMINE アカウントがない方は、OPAC 端末で OPAC 検索がご利用いただけます。

 小・中・高の教科書はありますか？

⇒ 図書館3階にありますが、すべての教科が揃っているわけではありません。

 図書館のPCから印刷はできますか？

⇒ できます。詳しくは設置PCの周辺にある案内をご覧ください。

【レアな質問】

 この課題の答えを教えてください！

⇒ 図書館では答えは教えられません。調べ方はご案内しますので、ご自身で頑張りましょう。

（館員・閲覧係）

図書館からのお知らせ

図書館の動きを皆様にお知らせし、一層ご活用いただけるよう、2023年度の主な取り組みをご紹介します。今後もさらなるサービス向上に向け、取り組んでまいります。

○概況

2023年度より図書館システム（iLiswave-J）がクラウド版に移行した。これに伴い、検索画面や機能の一部が変更となっている。年度末に実施したことにより、最小限の閉館で移行することができた。

5月に新型コロナウイルスが2類から5類に変更となり、大学の行動指針も制限が撤廃された。これに伴い、卒業生による利用の事前申し込みを不要とした。在学生への郵送貸出（片道郵送費負担）は泉会の援助により継続している。

8月には一般の見学者の受付も再開し、132件の申し込みを受け付けた。来館者は1000人を超える（入学課引率による高校生の見学を含まない）。海外からの来訪も多く、妹島和世氏による建築への注目は引き続き高い。

○リポジトリ

日本女子大学学術情報リポジトリは、NIIが提供する共有システムを利用している。システムの基盤となるソフトウェアのバージョンアップのため、今年度は長期に渡り登録を停止することになった。移行データの確認等を経て10月に登録を再開し、年間でのDL数は284,028件、昨年度の1.3倍以上となっている。

○電子図書館 LibrariE（ライブラリエ）を利用した学生選書

ライブラリエはタブレットやスマートフォン、PC等で一定期間「借りて読む」ことができる学生向け電子書籍サービスである。2022年度後期に学生入館者の投票により購入タイトルを決める試みを行い、一定の成果を上げたことから、2023年度は前期・後期とも投票を実施した。前期のテーマは「SDGs」「関東近郊のおでかけ・旅行ガイド」「一人暮らしに役に立つ」「多文化を学ぶ」で、227票の投票があり、38タイトルを購入した。後期は「哲学」「話す・考える・書く技術」「本屋大賞ノミネート作」「美術館・博物館」の4つのテーマに対して152票の投票が寄せられ、57タイトルを購入している。

○展示

6～9月に「目白・目白台建造物探訪」、1～2月に「ドラゴンはどこにいる」、3月より「貴重書『源氏物語』展示～目で見て、読んで楽しむ『源氏物語』～」の展示をエントランス・スロープで行った。この他、5月の泉会総会開催に合わせ、泉会寄贈により購入した貴重書「ケルムスコットプレス刊本」の特別展示も行っている。

○ラーニング・コモンズさくらの活動

のべ7名のラーニング・サポーターが活動し、135件の相談を受け付けた。4月には「ラーニング・コモンズかえで」に向向、主にITに関する相談に対応した。ラーニング・サポーターによるオンラインミニ講座も計6回開催、のべ179人が視聴した。

編集後記 5月に読売新聞の連載「知の館・大学図書館を巡る」に本学図書館が取り上げられました。これまで建物が注目されることは多かったのですが、利用者からの視点や思いがけない構図の写真が取り入れられた記事は新鮮でした。勉強に、調べ物に、グループ学修に、学生の皆さんは図書館を大いに使ってください。大学時代に素晴らしい本と素敵な仲間に出会えますように。

2024年度編集委員：飯山智子、水嶋寿恵、南木香織（飯山）

2023年度実施した利用者向け講習会

1年次オリエンテーション

遠隔（動画を作成しLMSにて公開）による実施

教員からの依頼等により授業時間内に実施

計31回489名参加

児童 2回18名、食物 2回11名、

被服 4回35名、英文12回176名、

史学 5回128名、社会福祉 5回88名、

教育 2回51名。

この他、1学科にテキストを提供した。

図書館主催で実施

・新大学院生オリエンテーション

図書館 HP にスライドを掲載